
The Main Dish

吉岡 意織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Main Dish

【Nコード】

N5656N

【作者名】

吉岡 意織

【あらすじ】

登場人物達が仲間となつて、それぞれの信念を貫く為に旅を続け、成長していく過程を描いたお話です。

思い切りヘヴィな部分もありますが、それと同じ位コメディ要素も沢山織り込んだ、大人向け冒険ファンタジー小説です。

旅の起源 く鳳ハツキく（前書き）

基本的にコメディ要素満載ですが、幅を広く書いているのでファンタジー小説とはかけ離れた雰囲気のスリアスさも含み、ギャップが激しい作品です。

旅の起源　〜鳳ハツキ〜

第一章 第一話 旅の起源〜鳳ハツキ〜

僕は玄関の扉を開く。

玄関には、靴が沢山転がっていた。あ、この汚れた黒いのは僕のだったな、と思い出す。

六人も居る兄弟が皆して脱いだ靴を揃えないので、狭い玄関はいつも靴がぎゅうぎゅうと押し競饅頭をしているみたいになっていた。そのせいで母は仕事から戻ると、いつも「ただいま」と言うよりも先にそれを咎めなければならなかった。僕らはすぐに「はい」と気持ちの良い返事をした。その割に靴を綺麗に並べ直す奴は居なかったので、母は決まって「返事だけは良いのよね」と言った。

「ハツキ」

一つ下の弟、光一が居間から顔を出す。

兄弟の中でとりわけ仲が良かった光一は、僕の事だけは名前です。僕の上にはさらに二人の兄が居て、一番上の兄は僕よりも五つ上、二番目の兄は三つ上だった。光一はどちらの兄を呼ぶ時も「瑛兄ちゃん」「和馬兄ちゃん」と、名前の後に「兄ちゃん」と付け足して呼んでいたが、僕の事だけは「ハツキ」と呼んでいた。

「ハツキ、お帰り！」

光一は昔から僕が帰ると、大抵一番最初に出てきてくれていた。久しぶりに光一の顔を見た。懐かしい光一の顔。僕は喉の奥がツンとするのをグツとこらえる。

ああ、このごった返した玄関。そして光一。僕は帰って来たんだ。家に、帰って来たんだ……。

「ただいま。……ただいま、光一」

積み重なる靴の上、子供の頃みたいに僕は、さらに靴を脱ぎ捨てる。

ぎしぎしと音を立てる廊下を、僕は足早に歩いた。早く兄弟の顔が見たくて、気が急いでいた。

玄関から廊下を歩いて、右手に居間がある。左には台所と食卓。僕はまず光一が顔を出していた居間を覗き込んだ。

「お帰り、ハツ」

「お帰りー」

「ハツ兄、お帰り！」

僕は堪え切れなくなる。視界が涙で歪んだ。久しぶりに会えたのに、顔がよく見えない。

「瑛兄……、誠司、尽……」

確かめるみたいに、名前を呼ぶ。誠司は僕より三つ下の弟で、尽は四つ下。

笑顔が、口調が、その雰囲気、あまりに昔と変わらなくて、僕は氷の様になってしまっていた心がドツと疲れを吐き出し、解けていくのを感じた。

「ハツ、お前、今日も抜き打ちテストで満点だったってな。光一から聞いた」

「ハツキの担任に聞いたんだよ。お前も負けないように頑張れとか言われた」

……抜き打ちテスト？

解けはじめた心が、また凍り始める。ゆっくり。

「ハツ兄、すごい！僕にも勉強教えて」

「僕も！」

勉強……？

「これやるよ、次に満点取ったらって、約束だったから」

瑛兄が、学生鞆からペンを取り出した。瑛兄が初めて自分のお小遣いを貯めて買ったペンだ。

僕はそれが羨ましくて、どうしても欲しくて、「飽きたら僕に譲って」と瑛兄にお願いした。

瑛兄は優しいから、満点と引き換えだと言ったんだ。

僕は怖くなる。

いらぬ、そんなのいらぬ。

「ほら、頑張ったな」

瑛兄が立ち上がったて、ペンを僕に手渡す。

五つも年上のはずの瑛兄は、僕を下から見上げていた。

そつだ。僕はもうずいぶん前に瑛兄の歳を追い抜いた。

歳も、背も。もう追い抜いた……。

僕は、また失望する。

「……ツ……おい！ ハツ！ 起きろ！」

聞きなれた声に何度も呼ばれて、僕は目を覚ました。

ものすごい勢いで、体が勝手に上半身を起こす。

桜紅弥が迷惑そつな表情で僕のベッドの側にしゃがみ込んでいた。

「もー、ほんとお前と同じ部屋になると迷惑だ……」

「……ごめん」

また夢だつた。何度も何度も、僕は同じ夢を見る。かつての家、

仲の良かった兄弟達、そして瑛兄との約束のペン。

あれは僕がまだ十一の頃だつた。今から丁度十年も前の事だ。

瑛兄からもらつたペンは今も肌身離さず持つている。インクはも

つないけれど手放す訳にはいかなぬ。僕にとってはお守りになつて

いる。

「……もういいよ別に」

桜紅弥は口は死ぬ程悪いけれど、根はものすごくいい奴だ。一緒

に旅を続けている仲間内で、実は一番情が深いんじゃないかとさえ

思っている。

こつしてうなされる夜も、「迷惑だ」とか「うるせえわ」とか言

いながらまた僕が眠るまで起きていてくれる。文句だけはしつかり

と言つけれど、それでも、何も聞かずに。

カーテンを開けると、外は嵐だつた。

「夏も終わりだな」

部屋の小さな冷蔵庫からビールを取り出しながら、ぼそつと桜紅
弥が言った。

嵐の音。嵐の音は嫌いだ。

嵐の夜に、僕は自分以外の全てを失った。

もし死ぬ前にたった一つ願いが叶うとしたら、僕は迷わず願う。
家に帰りたい。

ほんの一時間でいい。

僕等を甘やかしがちな父と、世話焼きな母、そして賑やかな兄弟
達が居るあの家に帰って、何気ない時間をもう一度だけ見つめたい。

旅の起源 く 鳳ハツキく (後書き)

目を通していただいて、本当にありがとうございます！

ファンタジーとコメディ要素を強く入れつつ、シリアスさもガツと入れていくので、ギャップの激しいお話になり、あまり前例のない雰囲気になると思います。

私自身も初の試みなので、試行錯誤を重ねていますが、まとまりがなくならないように頑張ります…！

少しづつ書き足していくので、長い目で見守ってやってください

く 鳳ハツキ

朝起きると、部屋中に焦げ臭い匂いが立ちこめていた。

あー、またか……。

ハツキはゆっくりと体を起こすと、ベッドサイドのテーブルに置いた眼鏡に手を伸ばす。

ふるふるつと頭を軽く振ってから、同じくテーブルの上に常備してあるチョコレートを一ひとかけ口に放り込んだ。

チョコレートを朝一で頬張るのはハツキの習慣だ。小学生の頃、脳が疲れた時には甘い物が良いと聞いてから、脳味噌にスイッチを入れるつもりで朝一にチョコレートを食べるようになった。最初はただの日課に過ぎなかったが、続けているうちに本当にそれをきっかけにして脳が稼動する気になった。

パジャマのまま部屋から出ると、キッチンから咳き込む声が聞こえる。

「うつ……ゴホツ……カハツ……」

大丈夫か？　と思いつつも、ハツキは決してキッチンに向かうとしない。

「おや？　ハツキ、おはよう」

隣の部屋から、正悟が顔を出した。シルクの生地、オフホワイトのパジャマに身を包み、世にも爽やかな笑顔で正悟は微笑んだ。

「今朝の目覚めはあまり良くないんだ……この匂いのせいだね。」
そう言いながらハツキの前をスツと通り過ぎた正悟からは、ほのかに薔薇の香りがする。

正悟は薔薇を愛していて、ローズウォーターとやらをありとあらゆるものに吹き付けているのだ。

（爽やかすぎる……本当に寝起きか、この人は……）
突っ込みたくなる気持ちをぐつとこらえて、正悟の後に続いて廊

下を歩く。

正悟はキッチンの手前にある洗面所の扉を開けた。やっぱり正悟も、キッチンへ行くつもりはないようだ。

キッチンから聞こえる咳はほとんど間隔が短くなって行く。

「ゴホゴホゴホッ……かはっ……うっ……うげほっ……げほっ……はあ、はあ……ううっ!!」

「あ　　もおっっっ!!　　うるっせ　　!!!!」

一番最後に起きた桜紅夜が、たまりかねてキッチンまで突進し、音を立てて扉を開いた。

洗面所から顔だけ出す格好でキッチンを見ると、キッチンは煙で灰色になっていた。

「うわぁ……まるでモノクロの映画のようだね」
歯ブラシを口に入れたまま、正悟が言った。

「今日は一段とひどいな。僕、今朝の朝食はいらさないや。洋服や髪に、あの匂いがついてしまったりしたら、とてもじゃないけど正気でいられる自信がないんだ」

今朝の食事担当はイツキだ。

イツキは料理の才能がまるでない。一切ない。目玉焼きを四つと食パンを四枚焼こうとするだけの事でキッチンを壊滅寸前にまでしてしまえる事は、むしろ才能だと、言えなくも、無いが……。
朝起きて焦げ臭い匂いがする日は、最初にキッチンへ立ち入った者がイツキを手伝う事になるので、そんな日は誰もキッチンへ行きたくない。

ハツキも正悟も、いつもの習慣なら歯を磨くのは朝食の後なのだけれど、今日に限って朝起きて一番に洗面所に居るのはそのせいだ。
「なら、朝食、どうするんですか?」

ハツキがたずねると、正悟は美しく微笑みながらサラッと答える。
「お向かいさんのカフェへお邪魔するさ。だから、ハツキ……。……ね?」

少し垂れ目がちで深いブルーの瞳は、これでもかという程艶っぱ

く、フェロモンを振りまきながらハヅキを見詰めた。

その魅惑に、ハヅキは一瞬だけ飲み込まれそうになり、ぽわん……としてしまったが、ハツと我にかえると、差し出された正悟の白い手をパンツと払いのけた。

「駄目ですよ！ 今月は生活費が苦しいんですから！」

「ええっ?! この僕がこんなをお願いしているのにつ！ あの匂いに僕がまみれたら、この街の女性がみんな泣いてしまう事になるんだよ?!」

「知りませんよ!! いいですかっ?! 明日ですよ！ 今月の家賃の支払いはっ！ あんた十日前に新しいジャケット新調しましたよね?! 値段覚えてますか、六万五千Gですよ!! たかが洋服に!! 今月こなした依頼が八件、トータルの稼ぎが十二万八千二百Gなんです！ そういえば初月にも……」

「あぁっ……」

「? ……なんですか?」

「ハヅキ、元氣いっぱいなのはいい事だけれど、もう少し小さな声で話してくれないと、僕の鼓膜が破れてしまうよ。繊細なんだ……」

「んな訳あるかよっ!!」

その後結局、ハヅキはキッチンの掃除をする事になり、朝から全身を汚す事になった。そしてイツキも、掃除を手伝った。

料理は、桜紅夜が作る事になった。桜紅夜は短時間の間に、チーズとベーコンのホットサンドイッチ、野菜サラダ、フルーツヨーグルトをテキパキと揃えた。ぶっきらぼうな性格に似合わず、桜紅夜は料理が得意なのだ。

料理なんか好きじゃねえ、と言う桜紅夜が、それならどうして“得意”になってしまったのかというと、兄の正悟との二人暮らしが長かった事が原因に違いない。

「おい、もうメシできるぞ。ちんたらすんな」

そう言っつて、イツキをジロリと睨むその鋭い目つきは、彼の長くて明るい茶色の髪をまとめている三角巾とエプロンに、死ぬ程不釣合

いだ。

「あははははははっっ！！ 何度見てもチョーうけるんだけどっ！

」
「ああ？！ 笑うんじゃないー！ 誰の尻拭いしてると思ってたんだ！

」

「はははははははっっ！ 台詞がよけーミスマッチだしっっ！！」

「イツキ、てめーいい加減にしねえとぶっ飛ばすぞ！！」

ハヅキはすすだらけになりつつ、そんな二人を横目に、部屋まで正悟を呼びに行くのだった。

(……な、何かが違う、何かがっ！)

正悟と一緒に戻ってきたハヅキは、食卓がやけにきらびやかでエレガントになっている事にひどい違和感を覚えた。

特に、そう。正悟の席だ。

“匂いもつきにくいし、割れることもないし”という理由で揃えたはずのステンレスの食器が、正悟の席だけ全て陶器の洋食器に変わっている。

「相変わらず悪趣味だよなあ、おい……」

口ではそういつつ、全く気にも止めていない様子の桜紅弥は、その正悟のティーカップにハーブティーを注いだ。

「すっげーなあー！」

ハヅキの隣で、イツキは異様な程に大きな目をキラキラさせている。

長く美しいその指でゆつくりとティーカップを持ち上げ、ハーブティーの香りをすうっ、と吸い込んで楽しむと、正悟は言った。

「うん。いいね。とてもいい。見てごらん。ルビーを陽の光にかざした様な色をまとっているこのローズヒップティーに、とても相応しい美しいカップだろ？ 魅力を引き立て合うことが出来るよう

なパートナーが、ずっと必要だったんだ。今日は喜んでいようだよ、その証拠にとっても美味しい」

(……………は?)

言われるがままにきちんとティーカップを眺めた真面目なハヅキが想像ができたのは、ティーカップのおおよその値段くらいだった。あのカップは、絶対に高い。そしてそれを含むこの洋食器一式は、もつと高い。

「……………正悟さん。一体……………どこから……………」

ハヅキはわなわなと手を震わせながら、やつとのことですら質問した。こみ上げる感情の波を、押し込めるのに必死だった。

「これかいつ?!」

良くぞ聞いてくれました、といわんばかりに、正悟は自慢げに、そしてとても愉しげに話し出す。

「ふふ、とても美しいだろう? やっぱり、君も気になるかい?

この食器たちが放つ輝きは、君でさえも魅了してしまうんだね。そうか、ふふつ。これはね、この国の王室で使われている物なんだ」

「はあつ?!」

「僕のハニーに、王室勤務のメイドが居てね、一度も使われる事なく倉庫に放つてあった食器を、オークションにかけていたんだよ。さすがに王室の物となると値が張ったんだけどね……………。僕への愛の証に、と言つて、驚くほど格安で譲ってくれると言うものだから」

「へーそれはそれはヨカッタ。で結局いくらだったんデスカ」

「たったの4万Gだよ!! この一式で4万Gだよ!! ものすごい幸運に恵まれたろ?!」

無理やり抑え続けた感情は、まるで風船が割れるように急にその存在感を失った。その代わりなのだろうか。ハヅキは眩暈がする。

「普通ならこうはいかないさ。倍の8万Gどころかもつ……………」

「破産ですよ!! 今月破産ですよっつっ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5656n/>

The Main Dish

2010年12月13日02時38分発行